

黒田官兵衛(如水)と福岡大学

福岡大学の前身である福岡外事専門学校(昭和 22 年創立)の学び舎(のちに福岡商科大学の教養課程、さらには商学部第二部として使われた平和台校舎)は、福岡城を築いた黒田官兵衛(如水円清と号す)の隠居屋敷があった「御鷹屋敷跡」にありました。

九州の商都・福岡

福岡市は古代以来、アジアなканずく中国、朝鮮との外交・貿易の中心地であり、豪商が大きな役割を担ってきた。戦国時代、博多は堺に次ぐ「自治都市」であったといわれている。

関ヶ原の戦いで黒田官兵衛の嫡男長政は徳川家康に従い、東軍の勝利に大きく貢献した。一方、官兵衛は九州にあって、西軍の諸城を攻め九州を席卷した。家康はこれらの功績により長政に筑前国を移封した。官兵衛・長政親子は筑前国(福岡の地)を拝領し、大分の中津城から名島城(現・福岡市東区)に入った。三方が海という立地と尖端が丘陵になっている名島城は要害の立地ではあるが、規模が小さく、城下も狭く発展性がない。そこで官兵衛親子は守成の時代にふさわしい城の立地を求めた。その際、「南蛮貿易」で富んだ豪商の商業都市(自治都市)博多に隣接した福崎の地に城を築くことを計画し築城した。1601年から7年をかけて城は完成したが、如水は1604年、完成を見ることなく死去した。先祖の故地、備前福岡(現・岡山県瀬戸内市)に因んで「福岡城」と命名し、長政以来12代にわたり、黒田家は福岡藩主として福岡の発展の基礎を築いてきた。

徳川幕府が1639年鎖国令を発するまで、官兵衛・長政親子は博多の豪商たちの協力を得ながら、福岡の商業の発展と東南アジア・東アジア貿易の役割を担ってきた。博多の三大豪商(神屋宗湛、島井宗室、大賀宗伯)は商業資本の蓄積のもと、アジア貿易の発展に貢献していたが、鎖国令とともに幕府直轄地の長崎がアジア貿易を統括したため、福岡は地方都市へ転落していった。

徳川幕府の対外交渉の窓口は長崎、対馬、薩摩、松前に制限された。福岡藩は1641年(寛永18)、長崎港の警備を佐賀藩と一年交代で受け持たされた。さらに朝鮮通信使の接待の役目を仰せつかった。その負担と引き換えに、福岡藩は中国、朝鮮や西洋なканずくオランダからの科学、経済、文化を吸収した。さらに長崎街道の宿駅の整備、長崎と江戸を結ぶ公道を支えた。

博多の豪商たちはアジア貿易に代わって金融業をおこし、国内の商人、全国の大名、外国の商人へお金を融通した。金融業を基本に農水産物を扱う問屋の

町をつくり、年貢米輸送などを行う廻船とともに、国内商業流通の発展へと役割を変えていった。幕末、西洋列強の東アジア進出に伴い、福岡藩の長崎警備も強化され、藩の財政を圧迫した。

明治に入り、明治 2 年 2 月、長溥(11 代)が隠居し、長知(長溥の養子 12 代)が家督を相続、6 月には福岡藩知事を拝命する。藩では戊辰戦争などで多くの藩債をかかえ、太政官札を偽造(太政官札贋札事件)、摘発により明治 4 年 7 月長知藩知事は免職処分をうけ多くの藩の人材も失われた。同年「廃藩置県」が実施されると、福岡初代の県知事には有栖川宮熾仁親王が任命された。

明治以降の福岡・博多は再び経済発展の基礎を創っていった。福岡周辺の地域、筑豊、三池では近代のエネルギーである石炭を産出し、大牟田や若松・門司は石炭の搬出港として、北部九州のみならず、日本全体の経済の発展に貢献した。

さらに、日清戦争の賠償金をもとに建設された官営八幡製鉄所が明治 34 年(1901)に操業を開始し、北九州は近代工業地帯として発展していくが、福岡はあくまで金融・商業・消費都市としての性格を以って今日に至っている。

福岡高等商業学校の創立と変遷

加えて、福岡市は全国に名高い「大学都市」でもある。現在福岡市には 11 の大学があり、学生数では東京(23 区)、京都市、名古屋市、横浜市に次ぎ、7 万人を超える大学生が福岡市で学んでいる(文部科学省『学校基本調査』平成 25 年度)。人口あたりの学生数では京都市、東京(23 区)に次いで第 3 位であり、学生の多い街である。

明治 36 年(1903)に京都帝大分科大学として福岡医科大学が設置され、明治 44 年(1911)「九州帝国大学」として独立し、戦後の学制改革により九州大学となった。現在は独立行政法人である九州大学と私立の福岡大学や西南学院大学などの大学が福岡・九州における高等教育と学術研究の背骨を支えている。福岡大学と西南学院大学は、東京の「早慶戦(慶早戦)」ともいふべき、グラウンド内外で九州の「福西戦(西福戦)」を展開している。

わが母校・福岡大学の沿革を振り返ってみよう。

1920 年代以来、日本は満州への移民を始めていたが、1929 年に世界恐慌、1931 年には満州事変が勃発した。こうした時代背景のもとに、アジアで活躍する商業専門の人材養成教育機関として福岡高等商業学校が昭和 9 年(1934)に文部省の設置認可を得た。こうして福岡大学の前身校である「福岡高商」が聖地油山の麓、七隈の地に誕生した。

油山の由来については 8 世紀ころ、インドの帰化僧といわれる清賀上人が椿の実から油を搾り拾土郡の天皇勅願寺に灯油として送ったところからきているようだ。また、12 世紀ころ、油山には 360 の僧坊があり、九州第一の学問の道場があったところである。鎮西上人は比叡山で修業したのち、30 歳の若さで油山僧坊の学頭に推挙されている。ほぼ 6 年間(1191~1197)学頭として教え、多くの僧が参集してきたようである。その後、京都へ行き、法然上人の弟子となり教えを乞い、法然上人に次ぐ第二の祖師といわれている。油山を頂く七隈の地は水質にも恵まれ「山紫水明」の地であり、学問をするには最高の立地である。

そののち昭和 19 年(1944)八幡にあった「九州専門学校」は「福岡高商」と統合され「九州経済専門学校」となった。朝倉出身の朝日新聞記者・歌人でもあった花田大五郎先生は京都帝国大学学生監事務取扱、大阪商科大学の教授を経て「和歌山高商」校長から「九州経専」の校長に就任した。敗戦の翌年(昭和 21 年)、「九州経専」の校名を「福岡経済専門学校」に改めた。

福岡城と福岡大学

福岡城の下の橋御門の近くに官兵衛(如水)の隠居屋敷跡(御鷹屋敷、現在の牡丹園・芍薬園)がある。貝原益軒編著『筑前国続風土記』巻三に、「城内のいぬみ(北西)に小高き山あり。是又本丸より高かりしかば、山をならしてひきよ(低い)岡とし、如水公の兔裘(ときゅう)の宅地(隠居地)とせらる。」とある。

昭和 22 年(1947)、中村治四郎先生がこの御鷹屋敷跡地に「福岡外事専門学校」を設立された。これが福岡城とのご縁の始まりである。2 年後の昭和 24 年(1949)、この「福岡外専」は「福岡経専」と統合し、新制大学の「福岡商科大学」として生まれ変わった。初代学長は花田大五郎先生(のち大分大学長)、副学長は中村治四郎先生であった。その後、中村先生は九州英数学館、九州高校、九州商科大学(のちの九州産業大学)を創立されている。

花田学長は京都帝国大学法学部の出身で、その学部の同窓会の名称は「有信会」であった。先生は母校京大への思いがあったためか定かではないが、それまでの福岡高商から福岡経専の同窓会「友信会」を、福岡商科大学の同窓会設立時に「有信会」という名称でいこうと言われたという。昭和 18 年、福岡高商卒(西南学院大学卒)の末永直行氏(元博多鉄道構内営業社長、初代の在福岡フランス名誉領事、末永文化振興財団理事長)は有信会の第 2 代理事長を 20 年近く務めたのち、卒業生として初めて平成 18 年に第 9 代福岡大学理事長(直行氏の父、敏毅は第 4 代「福岡高商」の理事長)に就任している。

昭和 25 年(1950)には「福岡商大」の短期大学部が併設され、「福岡外専」の校舎(福岡城内の校舎・平和台校舎)が使用された。初代の短期大学の学長に今村有先生(福岡大学初代の学長)が就任されている。今村学長はお茶を飲みながら、同僚の先生たちと大学設置の夢を語っておられたという。また 1953 年には商学部第二部が設立され、その校舎として平和台校舎が使用された。さらに昭和 31 年(1956)には「法経学部」が増設され、教養課程の講義は平和台校舎で行われた。同年、名称を「福岡大学」と改め、今日に至っている

福岡大学第一回生として法経学部経済学科に入学した私は 2 年間平和台校舎で学んだ。ここで教授たちの話しかけもあり、教授と学生の会合を持ったのち、昭和 32 年、学生有志はクラブ・経済研究同好会(昭和 33 年経済学研究部に昇格)を立ち上げた。先輩のいない学生が梅田正勝教授(昭和 34 年法学部と経済学部とが分離独立、経済学部初代学部長)の指導のもと、経済学を学んだ。研究部の学生は当初から福岡大学特待生を輩出し、九大生に劣らない学生集団を立ち上げた。

その後、福岡城跡の整備に伴い、商学部第二部は筑紫女学園短期大学の跡地(南区大楠)へ、そして平成 11 年(1999)七隈の地に移転、統合された。また、平成 17 年(2005)2 月 3 日、地下鉄七隈線が開通し、大学キャンパスと大学病院に直結する「福大前駅」が完成した。

福岡大学「中興の祖」といわれる初代今村有学長は、昭和 34 年の法学部、経済学部、同 35 年の薬学部、同 37 年の工学部、同 44 年の人文学部、体育学部(現スポーツ科学部)、同 45 年の理学部などを設置し、総長就任後は、第 2 代河原由郎新学長とともに同 47 年の医学部の設置を実現した。昭和 40 年には、研究の向上と学生の質的向上のため大学院法学研究科、経済学研究科の設置を手始めに、各大学院の設置、整備に貢献された。

日本では唯一、医学部、薬学部、スポーツ科学部の三学部を持つ福岡大学は、9 学部・大学院 10 研究科を擁する西日本屈指の総合大学となった。

福岡大学と福岡城とは、昭和 22 年(1947)「福岡外専」の設立から商学部第二部の高宮移転まで 31 年のご縁であった。官兵衛・長政親子は軍師、戦略家、名築城家として評価されているばかりではなく、博多の豪商とともに東南アジア・東アジアの貿易、文化の拠点としての福岡の基礎を築いたことも銘記すべきだろう。福岡大学の「建学の精神」である「思想堅実、穩健中正、質実剛健、積極進取」の中に、官兵衛親子の生き方に通ずるものを見出すことはできないだろうか。

福岡大学は戦前・戦中・戦後の先人たちと中興の祖といわれる今村学長以下教職員の努力により、今日、全国有数の大学に成長している。

第3代伊東正則学長は50周年記念事業の一環として、16階建の文系センター棟を建築し、その玄関に今村学長の胸像を建て記念している。

「保険論の泰斗 今村 有先生(一八九七 — 一九七九)は、多年にわたり福岡大学の学長・総長として大学運営に全力を傾注し、これを私学の雄たらしめた功労者である。創立五十周年を迎えるにあたり、ここに先生の胸像を建立し、その比類なき功績を讃える。昭和五十九年十月 学校法人 福岡大学」

また、伊東学長は文系センター棟の広場に、噴水と大きな岩に刻んだ河原先生の揮毫になる「建学の精神」の碑を建てている。

いうまでもなく、福岡を拓いた官兵衛親子同様、福岡大学は福岡・博多と深い絆で繋がっている。福岡大学がこれからも福岡市、いや日本・世界にとって無くてはならぬ存在として、その価値が評価されることを願ってやまない。

福岡大学 名誉教授
小 西 高 弘
(経済学部第1回卒業生)